

教員の授業観, 資質・力量観に関する基礎的研究

鈴木眞雄・実践的指導力研究プロジェクト
(心理学教室)

Teacher's Career Development : Analysis of Beliefs on Teaching

Masao SUZUKI and Project Team on Teacher's Professional Career Development
(Department of psychology)

はじめに

文部大臣の諮問機関である教員養成審議会(会長: 蓮見音彦)の第1次答申が1997年7月28日, 文部大臣に提出された。その答申の内容が具体化された新カリキュラムは2000年4月入学生から適用されるとのこと。このことを報じた当日の新聞の見出しは、

- ・「いじめ」問題に対処できる教員に 教科より実践力重視 (毎日新聞: 1997・7・28)
- ・いじめなどの問題に対処 教員の指導力重視 (朝日新聞: 1997・7・28)
- ・教育実習を4週間に (読売新聞: 1997・7・29)
- ・「社会人先生」拡充へ, 閉鎖的な学校に新風を (中日新聞: 1997・7・28)
- ・子どもと, 人間として向きあい, 民主的モラル体現する教師こそ, 教師の資質向上させる条件の整備が必要 (赤旗: 1997・7・28)

などであった。

教員養成審議会や文部省等は「いじめ」などの問題に対処できることが、「実践的である」と考えているようである。しかし、「実践的である指導力」とは、一体どんな指導力なのであろうか? 「いじめ」などの問題に対処できることのような対処療法的な局限された指導力なのであろうか? また、屁理屈のようではあるが、実践的でない指導力というものが存在しうるのであろうか?

問 題

教員の資質・力量に関しての研究はこれまでにいくつか報告されている(鈴木眞雄他 1977, 神山栄治他 1982・1983, 永岡 順 1983, 徳山 明 1988, 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信定 1988, 子安増生 1988, 藤本光孝 1995, 松田 惺・今栄国晴 1995)。

しかし, 実践的指導力となると, これまでは「実践的である」ことは, その時, その場所に応じて求められる資質・力量であると考えられていたようで, 毎日の教育実践活動に携わらない大学などの研究者には扱い難いものであった。それ故に, この「実践的」とい

う言葉が研究者に用いられることはほとんど見られなかった。

最近では, 日本教育大学協会第二常置委員会(1996)が「実践的指導力」についての考え方を提示して, 教職科目担当教官からみた実践的指導力の考え方を調査し, その結果を報告している。この調査で取り上げられた実践的指導力の考え方は以下の4つである。

- ①教職への意欲(教育への意欲・関心, 知的好奇心, 人間的魅力, 深い教養など)
- ②教育への基礎科学(教育学, 教育心理学等)についての学力と応用力
- ③教科および授業についての理解と能力(教科の内容についての理解と学力, 授業案の作成能力と授業過程の構成力, 教材開発の方法の理解と能力, 授業研究の理論・方法についての理解, 資料活用能力, 表現力等)
- ④生徒理解の視点や方法についての理解と能力(子どもの理解のための理論と方法, 子どもをとりまく環境や社会的動向, 学級経営や生徒指導の方法, 教育及び教科への社会的要請, などについての理解と能力)

大学における教職科目担当者の回答は, ほとんど4つの考え方に含まれるものであったが, 分類しにくい意見も寄せられたので, このような意見は表として纏められており, 興味の湧くところである。しかし, これらの意見は, 現職の教員の意見ではなく, 教職科目担当教官のものであるので, 現職教員の意見との間にズレが存在するかもしれない。実践的指導力の内容について検討するためには, 現職の教員との比較対照が必要であると報告書は結んでいる。

目 的

日本教育大学協会第二常置委員会の報告において述べられているように現職の教員が考える「実践的指導力」について, 調査することが求められる。さらに, 教員養成系大学の学生が如何に考えているか, 調査することも求められよう。しかし, 「実践的指導力」について直接その具体的内容について問うことは「実践

的]、あるいは「実践的指導力」の定義が明確にされていない現状では直接的に「実践的指導力とは何か」の問いを発しても、満足のいく回答は得られないであろう。

そこで、問題の項で述べた教員に求められる資質・力量に関する研究のうち、神山栄治他（1982）の挙げた9項目を教員の資質・力量と考え、それをもとに調査内容を構成する。

併せて、教員の授業観について、20年前に行われた鈴木眞雄他（1977）の調査結果の比較を行うべく、同じ項目を取り入れる。

方法・手続き

調査Ⅰ 現職の教員

調査内容：

①授業観について

A：授業の中では、教師は生徒の学習効果を高めるための諸条件を整えてやる必要がある。そのためには、教育科学の知見を積極的に取り入れた、できるだけ綿密な授業案を作り、それを正確に実行することが必要である。教師は、授業を勘や経験にのみ頼って進めることなく、授業に科学性を持たせることが必要である。

B：授業というものは、教師と生徒による創造であり生きたものである。それ故、あらかじめ大筋の授業案は作るものとしてもそれにとらわれる必要はなく生徒の主体性や興味に応じて随時変化すべきものである。そこに創造的契機があり面白さがある。かかる意味では一種の芸術といえるものかもしれない。

②教師が高めたほうがよいと思われる資質・器量

1. 社会的視野を広め、教養を高める。
2. 教育愛・情熱を強める。
3. 教育に対する基本的考え方・信念を強く持つ。
4. 教育技術を高める。
5. 生活指導の技術を身につける。
6. 子どもの理解を深める。
7. 教科内容の知識を増やす。
8. 学校の管理・運営の知識・技術を身につける。
9. 教師集団内の人間関係を良くする。
10. その他の資質・力量

あなたが選んだ資質・力量について

- 1) この資質・力量を選んだ理由をお書きください
- 2) この資質・力量はどこで身につけるべきだと考えますか。
- 3) この資質・力量に対して、大学で少しでも高めるための方法を考えてください。

③学級経営が上手な先生とは

④生徒指導の上手な先生とは

⑤「実践的指導力」とは

⑥教員を目指す後輩へのメッセージ

（具体的な調査項目は付録の調査票を参照）

調査対照：愛知教育大学の教育学教室と心理学教室の教員経験20年未満の卒業生300名。

調査方法：郵送により、調査票を郵送し、郵送により回収。

有効回答者数：190名

（郵送数：573名 回収率：33.2%）

調査Ⅱ 大学3年生

調査内容：

①授業観について

②教師が高めたほうがよいと思われる資質・器量

③学級経営の上手な先生とは

④生徒指導の上手な先生とは

⑤「実践的指導力」とは

（具体的な調査項目は付録の調査票を参照）

調査対照：愛知教育大学の教員養成課程の学生

調査方法：教育科目の講義時間中に実施

結 果

I 教員の回答者の内訳

教員の回答者の内訳を表1～4に示す。表1においては、男女別の回答者数を示す。偶然にも男女同じ数で、性による回答の偏りはない。表2では、愛知県内の慣例的な教育行政の区割り（尾張・三河・名古屋）にもとづく勤務地別の回答者を示す。これにおいても、勤務地による回答の偏りはない。表3には、勤務校の内訳を示す。表4には、教員経験年数を示す。

表1 教員の性別

性別	人数 (%)
男性	95 (50.0)
女性	95 (50.0)

表2 教員の勤務地域

勤務地	人数 (%)
尾張	57 (30.0)
三河	68 (35.8)
名古屋	59 (31.1)
県外	6 (3.2)

表3 教員の勤務校

勤務地	人数 (%)
小学校	126 (66.3)
中学校	55 (28.9)
養護学校・学級	6 (3.2)
高等学校	2 (1.1)
NR	1 (0.5)

表4 教員の経験年数

経験年数	人数 (%)
1～5年	16 (8.4)
6～10年	50 (26.3)
11～15年	53 (27.9)
16～20年	52 (27.4)
21～25年	19 (10.0)

II 学生の回答者の内訳

学生の回答者の内訳を表5～7に示す。表5においては、男女別の回答者数を示す。男女の比率は、本学全体の比率と近似しており、学生の意見を適切に反映していると思われる。表6では、教員養成課程の調査対象者の内訳を示す。

さらに、表7では山田洋次監督の映画「学校」をこれまでに観たかどうかの結果を示す。

表5 学生の性別

性別	人数 (%)
男性	210 (39.3)
女性	324 (60.7)

表6 学年の学年

学年	人数 (%)
2年	98 (28.5)
3年	113 (32.8)
4年	131 (38.1)
5年	2 (0.6)

表7 山田洋次の映画「学校」を観たか？

	人数 (%)
観た	149 (43.6)
観ていない	188 (55.0)
NR	5 (1.5)

III 授業観の比較

教員と学生の「授業観」を、20年前の調査結果と併せて図1、2に示す。授業観については、問題の項を参照のこと。

学生は20年前とほぼ同じ傾向で、「授業は、どちらかといえば芸術」と考えている。しかし、教員においては、1976年（鈴木他、1977）では、授業を芸術と考える教員と授業は科学と考える教員の割合は、ほぼ45%、44%であった。しかし、20年後の今回の結果では、「授業は科学だ」と答える教員は30%も減少して15%となり、「授業は芸術だ」と考える教員が80%に増えている。

この「授業は科学だ」と考える教員の減少は、いかなる要因によって生じたかを明らかにすることは難しいが、授業が、これまで以上に修行をつまねば上手にならないものと考え、研究の対象でなく、教員の個性によって決まるものと捉えているのではなからうか。

IV 教員と学生の考える「教師が高めるべき資質・力量・力量」について

現職の教員が現在、「教師として高めるべき資質・力量」について、9種の資質・力量から2つを選ばせた結果を表8に示す。教員と学生は共に「子ども理解」を最も多く選んでいる。全体的には同じ傾向である。

表8 教員と学生の選んだ資質・力量の比較

教育活動	教員 (高める)	学生 (身につける)
1. 社会的視野	75 (39.5%)	191 (55.5%)
2. 教育愛	18 (9.5%)	51 (14.8%)
3. 考え方・信念	56 (29.4%)	80 (23.3%)
4. 教育技術	55 (28.9%)	31 (9.0%)
5. 生活指導	9 (4.7%)	9 (2.6%)
6. 子どもの理解	118 (62.1%)	262 (76.2%)
7. 教科内容	16 (8.4%)	28 (8.1%)
8. 学校の管理	2 (1.0%)	3 (0.8%)
9. 人間関係	15 (7.9%)	22 (6.4%)
10. その他	16 (8.4%)	11 (3.2%)

V 教員経験年数と「高めるべき資質・力量」の関係

教員の経験年数別に、「高めるべき資質・力量」を選んだ人数を表9に示す。この表から、どの経験年数においても、もっとも選ばれたものは「子どもの理解を深める」であった。このことは、教員の最も難しい活動が、子どもを理解することであり、経験を積んでも「子どもの理解」だけは難しいと受け取られていることの証拠であろう。

表9 経験年数と身につけるべき資質・力量の関係

教育経験(年) 資質・力量	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25
1. 社会的視野	9	28	16	16	6
2. 教育愛	2	4	6	2	4
3. 考え方・信念	6	12	16	18	4
4. 教育技術	4	14	18	13	6
5. 生活指導	2	1	3	2	1
6. 子どもの理解	9	31	31	37	10
7. 教科内容	0	2	9	3	2
8. 学校の管理	0	0	1	0	1
9. 人間関係	0	6	2	5	2
10. その他	0	2	2	7	2

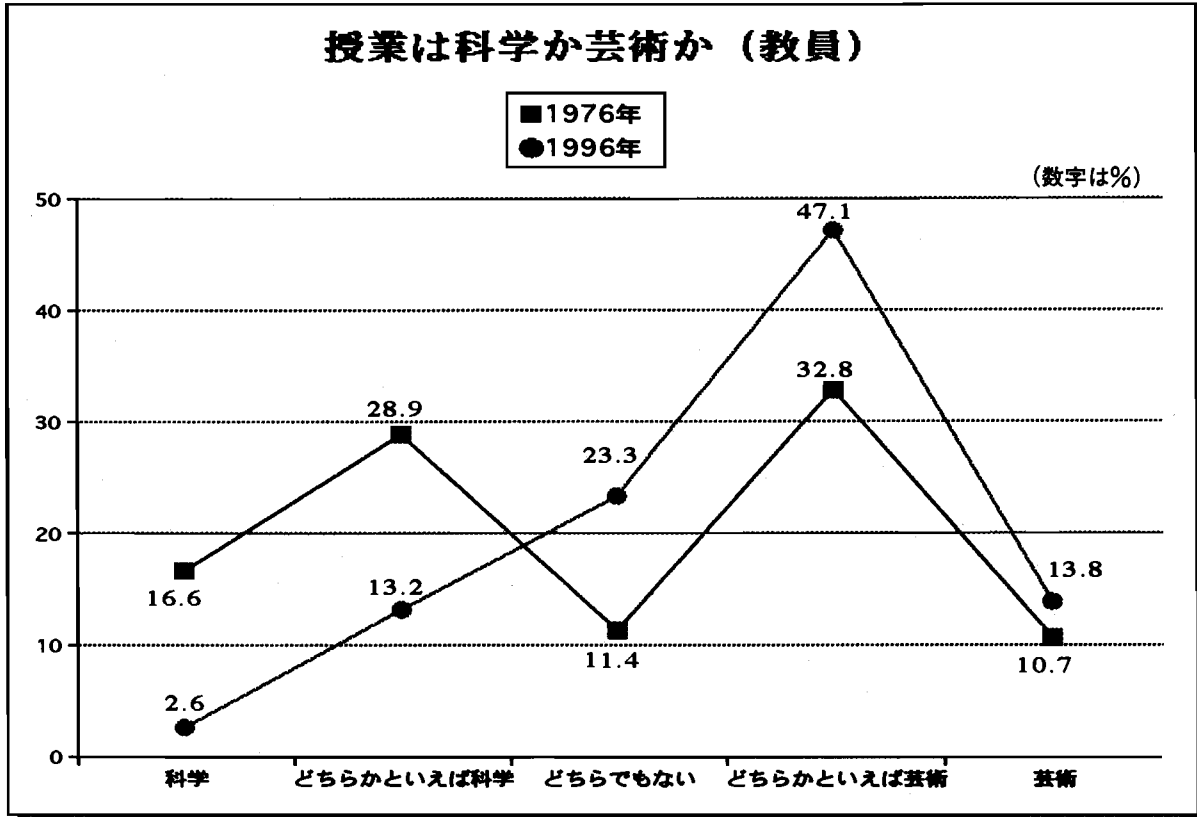


図1 教員の授業観の比較

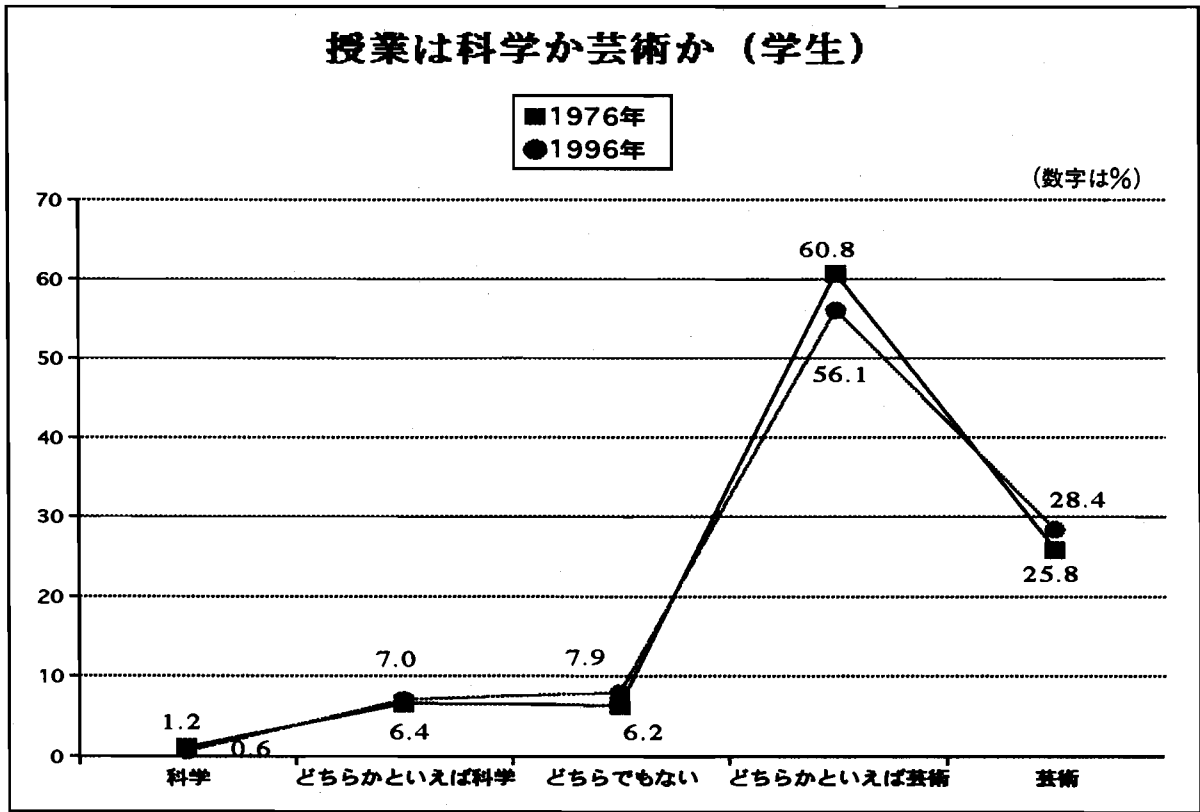


図2 学生の授業観の比較

VI 現職の教員が考える「子どもの理解」の教育方法とそれを教育する場所

これまで述べてきたように、現職教員にとっては、「子どもの理解」が重要な課題である。しかし、その教育方法、教育場所となると、大変難しいことであるのと思われ、簡単には特定できない。敢えて、回答を求めたので、その結果のうち、まとめることが可能なもののみを表10に示す。

その結果、教育実習の充実が最も多く、次いで子供と接する機会の充実、人間関係・対人関係の技術の習得、事例研究・授業分析と子どもの理解の方法は多岐に渡っている。このことから教師の仕事の多面性が明らかになり、大学で完成した教員を養成することの難しさが浮かび上がってくる。

また、教育経験年数の長短に拘わらず、「子どもの理解」が、最も高めたい資質・力量あることから、現職の教員においても「子どもの理解」は、どの年齢の教員にとっても重要であり、人間理解の奥の深さが感じられる。しかも、「子どもの理解」は「子どもと接すること」以外に方法はないであろうから、現職の教員にとっても「時間的・精神的ゆとり」をもって「子どもと接する」ことが今まで以上に求められる。つまり、教師にとって教育現場は、子どもを育てる場でありながら、教師自身も成長せねばならない世界である。子どもを理解することは大人にとって永遠の課題なのであろう。

さらに、教員養成審議会の中間報告を尊重しないわけではないが、教育実習を教員としての資質・力量の向上の最適な機会であると位置付けて、一人前の教員に仕上げることを目標とするよりも、教育現場を体験させ、授業実習よりも児童・生徒と関わることを中心とした「教職に対する意欲を喚起する」ための期間と捕らえるべきではなかろうか。加えて言うならば、大学では、人間関係や対人関係の技術の習得が現職の教員からは期待されているが、これは本当に大学で教育できることなのであろうか。

「子どもの理解」が高めたい資質・力量であることを支持する知見として、松田・鈴木の結果が挙げられる(松田・鈴木, 1996, 1997)。

これらの研究は、中堅教員の効力感の形成要因を探るもので、この効力感に大きく関わる要因として、「子どもとの直接の関わり」であり、「不登校の子どもを直接担当したことが教師としての成長の転機である」という記述が挙げられている。改めて、子どもの理解を深めることの重要性が明らかになった。

また、実践的ということは、実践の場でしか習得できない力量であると考え、現職の教員がこれ以上に子どもと接する時間が無くなると、現職の教員の効力感、さらには、教員の人間性の低下を招くことは必至である。子どもに「ゆとり」を保障しようとするな

らば、教員が「ゆとり」をもって毎日の教育実践ができれば、人間嫌いの若者を生み出すだけのことになるのではなかろうか。

表10 「子ども理解」の教育方法とその教育すべき場所

教育場所 教育方法	教育 現場	日常 生活	大学	研究会 研修	書物
教育実習の充実	17	2	5	—	—
カウンセリング の講義・実習	12	1	7	3	2
人間関係 対人関係	11	5	11	1	—
子どもと接する 機会の充実	16	2	3	1	1
子どもの理解を 深める研修	7	3	2	2	2
本を読ませる	8	—	—	—	3
事例研究 授業分析	10	3	4	4	—
合計	81	16	32	11	8

数字は回答数

VI 実践的指導力の具体的内容

実践的指導力がこれからの教員には必要であると言うことは、誰しも認めるものの、その内容についてはほとんど議論されてこなかった。そこで、実践的指導力についての自由記述の回答を分類して、纏めたものを以下に示す(記述の前の数字は回答者のコード)。

① 的確に処理・把握

- 006 机上の空論ではなく、日々子どもたちのなかで問題は起きてくるので、人間として子どもの問題を自分の問題として捕らえ的確に処理していける力。
- 034 机上の空論。たとえば「論文」とか「研究」とか「指導案」とかいった形式にとられるのではなく、知恵のように生きてはたらく、どのようにも対応できる指導力のこと。
- 052 勉強不足で、私にとっては聞き慣れない言葉ですが、頭だけの知識ではなく、実際に教える力。予定外のことが授業中に起こっても、サッと対応できるような力だと思う。
- 054 ①一方通行に話しをするだけでなく、相手との「やりとり」ができること。
②場の雰囲気や動向、相手の状況や心情を的確に把握し、俊敏な判断力・対応ができること
- 069 場面や個に応じた適応・柔軟性がある指導力のこと。実際に、生徒を動かせたり、納得させる行動力を大いに含むと思う。
- 072 机上の空論ではなく、いつも現場で役立ちその場その場で対応できる力。
- 096 その子どもをなるべくよく見ようとするこ

とで、誰にでもあう指導でなく、その時、その子にあった指導が必要であるということ。

- 1 0 3 机上の空論ではなく、いろいろな問題に出会った時、子どもと、真正面から向き合いどれだけ、解決していけるかどうかの力。
- 1 4 2 一人一人違った児童・生徒に対して的確に指導力を発揮できる力。
- 1 6 3 どんなことに対しても柔軟に対応できること。体面など気に掛けることなく心にゆとりのあること。

② 現場ですぐに役にたつ

- 0 2 9 理論ばかりでなく、現場で発揮される指導力
- 0 6 4 教育技術。例えば「全ての子どもに跳び箱を跳ばせられる方法」「いじめの兆候を見つける見立て」「初期のいじめの現象を見抜き、解決する見立て」
- 0 7 1 即、実践に結び付くような指導ができる力量
- 1 0 0 現場で即戦力になる指導力。経験から勝ち取ることが殆どで、現場でやってみないと分からない力。
- 1 4 7 子ども達の指導にすぐ生かせる力。
- 1 6 9 実際に生きて働く力を子ども達のなかに育てていくこと。頭のなかでの指導ではなく、現場に対応した指導力というように考える。

③ 指導

- 0 1 0 最近特に思うのは、教師＝人間的魅力＝単に面白いとか楽しいとかでなく、授業がきちんとしてできる。子どもに共感できること。人の心の痛みが分かることだと思う。それを裏打ちするための修練・学習・見識を広める活動は、絶えず行わないといけない。
- 0 1 5 知識のみでなく、子どもの実態を踏まえて指導する力。教師・子ども・教材がそれぞれつながりを持った授業を行えること。
- 0 2 1 自分の意図したことを子どもの中に息づかせること。ある種のマインドコントロールだとも思う。
- 0 4 3 あらかじめ用意されたものではなく、その時その場に、その子に応じた指導力。
- 0 6 3 子ども自身が、自分から進んで動き出すように指導できる力。
- 1 0 2 知識のみでなく、知識・経験を生かし、子どもとふれあいながら子どもの心をつかんで指導していくことのできる力(学習のみでなく、生徒指導も重要)。
- 1 1 0 単なる理論としての指導(仮説)ではなく、実際に生徒の実態に即して効果のある指導における方法。

- 1 5 5 児童のその後に良い変容が現われるような指導の方法。

④ 信頼関係

- 0 0 4 知識としての教科指導・生徒指導ではなく、疑似体験を通したトレーニングで身につく相互の信頼に基づく人間関係を創る能力。
- 0 2 0 実際に子どもに接して、子どもと共に悩み、歩んでいけること。
- 0 4 1 子どもに信頼される教育技術を持ち、子ども一人の人格を大切にできる力。
- 0 4 7 教育用「HOW TO」ではなく、常に仮説を持ち、実践し、反省する中で実践的な指導力がつく。しかし、根底は「子どもを成長させたい」という愛情。
- 0 5 4 ①一方通行に話しをするだけでなく、相手との「やりとり」ができること。②場の雰囲気や動向、相手の状況や心情を的確に把握し、俊敏な判断力・対応ができること。
- 0 7 5 子どもとの心の結び付きを得ることが「実践的指導力」だと考える。知識を尽くして指導しようとしても甲斐がないことがある。そこには、子どもの心を掴み得なかったと思う。心がつながったとき、響き合うものが生まれる。

⑤ 支援

- 1 3 6 目標に向けて子どもが活動するのを支援すること。
- 1 5 4 ひとり一人の子どもを目の前にして、その子の状況を的確に掴み細かいステップで実生活を着実に支援できる力。
- 1 7 1 目の前にいる児童生徒の教育欲求にどれだけ援助できるかということ。

⑥ その他

- 0 0 5 人間をより人間らしく育てていく能力。
- 0 3 3 生徒が確かな選択ができるためにいろいろな知識を蓄えること。
- 0 4 5 教師が生徒に求めている心豊かな人間になるように生徒と同じ人間になること。
- 0 6 8 「実践」「反省」ということをしっかりやっている人がもっているもの。
- 1 4 6 根っこに子どもや人に対する人権意識とか理想を持っていて、それを実現させていく見通しを持つ。現場での技術も必要。理想だけでもダメだし、技術だけでも良い教師とはいえない。

要 約

本報告は、マスコミや教員養成審議会などで取りざ

たされている「実践的指導力」について、現職の教員と学生がどのように考えているか、教員が高めるべき資質・力量は何か、さらには、その教育方法や場所などについて、愛知教育大学の教職科の卒業生と教員養成課程の学生を対象に調査したものである。

授業に対する考え方(授業観：授業は科学か、芸術か)については、20年目の調査結果と比較された。20年前の現職の教員と96年の現職の教員においては、全く異なる意見の分布であった。20年前は、「授業は科学だ」と考える教員は4割程みられたのに対し、96年では芸術だと考える教員が8割程であった。学生の意見は、20年前と同じで、9割が芸術だと考えていた。

また、現職の教員が「高めたい資質・力量」については、教員の経験年数に拘らず、「子どもの理解」が挙げられた。

また、実践的指導力の具体的内容については、授業の技術から教員の人間性まで、その内容はあまりにも多岐に渡っており、教員に求められる資質・力量については、限定することのむずかしさが、自由記述の回答から示された。

さいごに

教員に求められる資質・力量については、時代によって異なる。最近では、「実践的指導力」という魅力的な響きを持った言葉がもてはやされている。しかし、その内容はというと、多岐に渡りすぎて特定することは不可能である。

教員という職業は、Epstein, J. (Asahi Weekly, Dec.26, 1993) が「自己懷疑は教師の仕事につきものようだ。うまくいっているかどうか、けっして定かではないからだ」というような、一生この懷疑の念を持ち続けなければならないものようである。

また、教員という職業に最も必要なものは、「時間的ゆとり」「精神的ゆとり」が第一であることはいままでもない。人間誰しも「ゆとり」がなければ他人とゆっくり話しをしたり、理解したりすることができないことくらい解っているはずである。エンデ, M. の『モモ』を引き合いに出すまでもなく、教員を時間泥棒から護ることこそ、教員養成系大学の使命ではないであろうか。

最後に、教員に資質・力量の向上は、益々難しくなってきた。教師は、「授業を芸術と捉え、子ども理解が重要な課題」と考えていることが、本調査で明らか

になった。

このことは、教師の資質・力量の向上の方法・手順は「修行」に近く受け取れていることを暗示するもので、これまでの教育システムとは全く発想を新しくした教育システムが考案されなければならない。

参考文献

- 藤本光孝他(1995) 教育実践力の育成に関する基礎的研究 一・小・中学校の校長・教務主任が求める実践力 教科教育学研究 13, 187-200.
- 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久(1988) 教師のライフコース：昭和史を教師として生きて 東京大学出版会
- 神山栄治他(1982) 教職に対する教師の態度(I) 三重大学教育学部紀要 教育科学 33, 33-48.
- 神山栄治他(1983) 教職に対する教師の態度(II) 三重大学教育学部紀要 教育科学 34, 121-139.
- 子安増生(1988) 実践的指導力について 昭和62年度大学教育方法等改善経費研究報告書 「教員養成大学における教員適正の発見と実践的指導力の喚起に関する調査研究」第2号 愛知教育大学教育方法改善研究グループ.
- 松田 惺・今栄国晴(1995) 中堅教員による教員コンピテンスの認知 教育心理学フォーラム・レポートFR-95-001 日本教育心理学会.
- 永岡 順(1983) 教師の力量形成と研修システムの改善に関する実証的研究 筑波大学教育学系内教師教育研究会.
- 日本教育大学協会第二常置委員会(1996) 授業内容・授業方法改善に関する調査報告書.
- 小野寺淑行(1996) 教授・学習研究の動向と今後の課題一援助的ニーズに応える途を探る一 教育心理学年報 36, 114.
- 鈴木眞雄他(1977) 教育実習・事前指導に関する教師と学生の意識 愛知教育大学教育実習・事前指導改善研究会 28-51.
- 徳山 明(1988) 現職教員の生涯における資質の獲得 日米教員養成シンポジウム発表資料(大阪国際交流センター) 未公開.

付記 本研究は、平成7年度8年度カリキュラム改革調査研究経費「実践的指導力の教育方法に関するプロジェクト」による研究の一部を纏めたものである。

最後に、答えにくい質問に快く回答していただいた現職の先生方、本学の教員養成課程の学生諸君に感謝申し上げます。

実践的指導力研究プロジェクトは、以下の心理学教室の教官によって構成されている。

鈴木眞雄(代表)・佐藤勝利・中野靖彦・多鹿秀継・池上知子・竹内謙彰・斎藤 真。

(平成9年9月8日受理)

「実践的指導力」の教育方法に関する調査

＜ご回答の方法について＞
 質問は、選択形式と自由記述の2種類ありますが、選択形式の質問については、該当する選択肢の数字を○で囲むものと数字を記入していただくものがあります。
 自由記述については、答え難いものもあると思いますが、率直なご意見をお願いします。再度、ご返送いただきますよう併せてお願いします。

I あなたご自身のことについてお尋ねします（すべて平成7年度）。

- I-1 あなたの勤務校の所在地は？
 1. 尾張 2. 三河 3. 名古屋 4. 愛知県外
- I-2 あなたの勤務校は？
 1. 小学校 2. 中学校 3. 養護学校・学級 4. 高等学校
- I-3 あなたの現在の受け持ちの学年は？ 1. ____年 2. 受け持ち学年なし
- I-4 あなたの学校の規模は？ 学校全体で ____ 学級・
- I-5 あなたの教員経験年数は（平成8年3月で）？
 1. 1～5年 2. 6～10年 3. 11～15年 4. 16～20年 5. 21～25年
 6. 26～30年 7. 30年以上
- I-6 あなたの性別は？ 1. 男性 2. 女性

II あなたのご意見をお聞かせください。

II-1 「授業」に関して、下記のA、Bのような2つの意見があります。
 あなたの意見は、どちらに近いでしょうか？

A：授業の中では、教師は生徒の学習効果を高めるための諸条件を整えてやる必要がある。そのためには、教育科学の知見を積極的に取り入れた、できるだけ綿密な授業案を作り、それを正確に実行することが必要である。教師は、授業を勤や経験にのみ頼って進めることなく、授業に科学性をもたせる努力をすることが必要である。

B：授業というものは、教師と生徒による創造であり、生きたものである。それ故、あらかじめ大筋の授業案は作るものとしてもそれにとらわれる必要はなく、生徒の主体性や興味に応じて随時変化すべきものである。そこに授業の創造的契機があり面白さがある。かかる意味では一種の芸術といえるものかもしれない。

1. Aの立場にほぼ賛成である。
2. どちらかといえばAの立場にほぼ賛成である。
3. どちらともいえない。
4. どちらかといえばBの立場にほぼ賛成である。
5. Bの立場にほぼ賛成である。

あなたのご意見は

II-2 教師としての資質・力量が、今日ほど問われている時はないと思います。そこで、教師が高めたほうがよいと思われる資質・力量について、下記の項目のうちから最もその必要性が高いものを2つ選んでその番号を書いてください。

高める必要性の高い資質・力量：

1. 社会的視野を広め、教養を高める。
2. 教育愛・情熱を強める。
3. 教育に対する基本的考え方・信念を強く持つ。
4. 教育技術を高める。
5. 生活指導に技術を身につける。
6. 子どもの理解を深める。
7. 教科内容の知識を増やす。
8. 学校の管理・運営の知識・技術を身につける。
9. 教師集団内の人間関係を良くする。
10. その他の資質・力量（具体的に _____）

あなたが選んだ資質・力量の番号は？ _____と _____

II-3 II-2で選んだ資質・力量について：

最初に選んだ資質・力量の番号は _____。

- 1) この資質・力量を選んだ理由をお書きください。

- 2) この資質・力量はどこで身につけるべきだと考えますか？

- 3) この資質・力量に対して、大学で少しでも高めるための方法を考えて下さい。

2番目に選んだ資質・力量の番号は _____。

- 1) この資質・力量を選んだ理由をお書きください。

- 2) この資質・力量はどこで身につけるべきだと考えますか？

- 3) この資質・力量に対して、大学で少しでも高めるための方法を考えて下さい。

II-4 学級経営の上手な先生を思い浮かべてください。その先生について：

- 1) 学級経営はどんなところが上手なのでしょう？ 具体的にお書きください。

2) その資質・力量はどのようにして、どこで獲得されたと思われますか？

3) その先生の人柄は？

II-5 生徒指導の上手な先生を思い浮かべてください。その先生について：

1) 生徒指導はどんなところが上手なんでしょうか？ 具体的にお書きください。

2) その資質・力量はどのようにして、どこで獲得されたと思われますか？

3) その先生の人柄は？

II-6 生活指導の上手な先生を思い浮かべてください。その先生について：

1) 生活指導はどんなところが上手なんでしょうか？ 具体的にお書きください。

2) その資質・力量はどのようにして、どこで獲得されたと思われますか？

3) その先生の人柄は？

III 最近「実践的指導力」ということばがよく使われています。そこで、あなた考える「実践的指導力」とはどんなことだと思いますか。

IV 最後に、「教職の楽しさ・素晴らしさ・良いところ」を講義の中で、「後輩へのメッセージ」として紹介していこうと思います。皆さんの感じのままを書いてください。

最後まで、難しい質問に答えただき、有難うございました。

☆☆ 差し支えなければ、ご住所・お名前をお書き下さい。

ご住所
お名前

「実践的指導力」の教育方法に関する調査

＜ 調査のお願い ＞

いじめ・不登校が社会問題になってから、いろいろ対策が講じられてきましたが、一向に減らないようです。そして、教師に求められる力量も変わってきたようです。そこで、心理学教室の有志で、「実践的指導力の教育方法に関するプロジェクト」を企画し、研究を開始しました。「実践的指導力の教育方法」について、皆さんの率直な意見を聞かせていただき、みなさんの後輩のための教育に役立てたいと考えています。

回答は統計的に処理いたしますので、ご迷惑をおかけすることはありません。調査への回答を宜しく願っています。

「実践的指導力の教育方法に関するプロジェクト」
代表 鈴木真雄

I あなたのことについてお尋ねします。当てはまるものに○印をつけてください。

I-1 あなたの何年生ですか。

1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 大学院生

I-2 あなたの所属教室はどこですか。

1. 第一部 2. 第二部 3. 第三部 4. 総合科学

I-3 あなたの性別は？

1. 男性 2. 女性

II あなたのご意見をお聞かせください。

II-1 「授業」に関して、下記のA、Bのような2つの意見があります。

あなたの意見は、どちらに近いでしょうか？ 数字を○で囲んでください。

A：授業の中では、教師は生徒の学習効果を高めるための諸条件を整えてやる必要がある。そのためには、教育学の知見を積極的に取り入れた、できるだけ綿密な授業案を作り、それを正確に実行することが必要である。教師は、授業を勤や経験にのみ頼って進めることなく、授業に科学性をもたせる努力をすることが必要である。

B：授業というものは、教師と生徒による創造であり、生きたものである。それ故、あらかじめ大筋の授業案は作るものとしてもそれにとらわれる必要はなく、生徒の主体性や興味に応じて随時変化すべきものである。そこに授業の創造的契機があり面白さがある。かかる意味では一種の芸術といえるものかもしれない。

1. Aの立場にほぼ賛成である。
2. どちらかといえばAの立場にほぼ賛成である。
3. どちらともいえない。
4. どちらかといえばBの立場にほぼ賛成である。
5. Bの立場にほぼ賛成である。

あなたのご意見は

学生用つづき

Ⅱ-2 教員をめざしているあなたが、これからの教師として、身につけておくべきことはどんなことだと考えますか。下記の9つの資質・力量のうち、あなたが重要であると思う資質を・力量を2つ選んで、その番号を記入してください。

教師としての資質・力量：

1. 社会的視野を広め、教養を高める。
2. 教育愛・情熱を強める。
3. 教育に対する基本的考え方・信念を強く持つ。
4. 教育技術を高める。
5. 生活指導に技術を身につける。
6. 子どもの理解を深める。
7. 教科内容の知識を増やす。
8. 学校の管理・運営の知識・技術を身につける。
9. 教師集団内の人間関係を良くする。
10. その他の資質・力量（具体的に_____）

あなたが選んだ資質・力量の番号は？ _____と_____

Ⅱ-3 あなたがこれまでに教えを受けた先生のなかで、もっとも印象に残っている先生はどのような先生でしたか。

1) その先生のどんなところが印象に残っているのですか。少し具体的に書いてください。

2) その先生の人柄は？

Ⅱ-4 皆さんは、一度や二度はテレビドラマ「金八先生」を見たことがあると思います。いま、この「金八先生」を評価するとしたらどうなりますか。あなたの忌憚のない考えを聞かせてください。

Ⅱ-5 学校・教師、あるいは教育を取り上げた映画やドラマのうち、印象に残っているものがありましたら、そのタイトルを書いてください。

Ⅱ-6 山田洋次の映画「学校」は観ましたか。 1. 観た 2. 観ていない

ご協力ありがとうございました。